

琉球大学学術リポジトリ

戦後琉球における甘蔗（さとうきび）栽培の推移 (2)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池原, 真一, Ikehara, Shinichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19836

戦後琉球における 甘蔗栽培の推移

(さとうきび)

(二)

三、戦後の甘蔗栽培推移

終戦直後の琉球農業は専ら食糧作物の栽培に重点がおかれ、商品作物たる甘蔗の栽培は余り重要視されなかつた様に思ふ。残存施設を利用して僅かに製糖が行われていたが、そのほとんどが琉球内での消費であつた。

時代の推移と共に戦前唯一の換金作物であつた甘蔗の栽培は第一表第三表第五表に示す様に作付面積反当収量、生産高共に年々増加してきた。

第一表 年次別甘蔗作付面積

年次	耕地面積(A) 町	甘蔗作付面積(B) 町	B/A	1950年作付面積を100とした指数
1950年	31,525.0	1,349.68	4.3%	100
51	37,501.8	2,976.0	7.9	220
52	40,464.9	4,150.1	10.3	307
53	39,304.3	4,869.3	12.4	361
54	41,136.8	6,347.8	15.4	470
55	41,171.2	8,093.7	19.4	590
56	42,349.7	9,381.18	22.2	695

(註)糖業課資料より作成

戦前作付面積の多い年期は昭和四年期で次いで大正十五年期、昭和二、三年期、大正十四年期の順となつてゐる。この年期は何れも一万八千町歩を上廻り特に増加が目立つたのは大正六年期で前年期に比し一、三〇〇町歩の増反である。

第二表 地区別甘蔗作付面積

	耕地面積(A) 町	甘蔗作付面積(B) 町	B/A	1952年作付面積を100とした指数	
一九五一年	北部	7,487.0	212.0	2.8%	100
	中部	6,626.7	114.0	1.7	100
	南部	10,817.2	1,726.0	15.9	100
	宮古	9,663.4	1,895.0	19.6	100
	八重山	5,870.6	203.0	3.5	100
一九五四年	北部	7,825.7	377.8	4.8	178
	中部	6,337.7	134.9	2.1	118
	南部	11,091.0	2,305.6	20.8	134
	宮古	9,624.9	2,926.1	30.4	154
	八重山	6,257.5	603.2	9.6	297

第二表 地区別甘蔗作付面積

戦後一九五〇年から一九五六年に至る七カ年間の作付面積及び蔗作率は第一表の通りで、作付面積蔗作率共に年々増加し、面積において一九五六年は一九五〇年期の約七倍蔗作率において五倍強と大巾に伸びてゐる。特に一九五五年期の増反は著しく千七百余町歩となつてゐる。作付面積について昭和九年一昭和十一年三カ年平均は一五、四二六町余で之に対し一九五五年は五二%一九五六年は六〇%の復旧率である。蔗作率は前記三カ年平均二五・七%に対し一九五五年は一九・四%同五六年は二二・二%と年々上昇しほゞ戦前三カ年平均の域に達せんとしてゐる。

一九五五年	北部	7.728.9	489.0	6.3	231
	中部	5.844.4	253.7	4.3	223
	南部	10.825.4	3.056.9	28.2	177
	宮古	9.955.1	3.193.7	32.1	169
	八重山	6.817.4	1.100.4	16.1	542
一九五六年	北部	7.562.2	600.6	7.9	283
	中々	6.223.3	455.3	7.3	399
	南々	10.991.4	3.583.28	32.6	208
	宮古	10.136.4	3.375.1	33.3	178
	八重山	7.436.9	1.366.9	18.4	673

備考(1)1950年 1951年 1953年は資料不備のため省略した
(2) 糖業課資料より作成

戦前作付面積の多い地区は中部地区で、次いで南部、宮古、北部、八重山地区の順となっている。昭和九年一昭和十一年の三カ年平均地区別作付面積は北部一、五八九、五五町、中部五、一七〇、八八町南部四、六七五、六町、宮古二、二七〇、九六町、八重山一九一、八四町で戦後一九五六年の復旧率は北部三八%、中部九%、南部七七%、宮古一四八%八重山七〇%一%となっている。中部、北部の復旧はおそく全琉平均以下で中部は特に低率である。中部地区は特殊情勢下にあるので戦前の水準は愚か現在の全琉平均の復旧率否その半分程度に引上げる事も難事であろう。北部地区は前記三カ年平均の三分の一でまだまだ伸びる余地はあると思考せらるゝも競争作物たるパインの出現により大巾

の増反は望めないと思う。南部地区は三カ年平均に略々接近しているし種々の条件からして戦前の域に達する事は容易であろう。宮古地区は三ヶ年平均を四八%も上廻りそのため他の食糧作物を排除して伸びた、増反は望みうすむしろ減反を余儀なくされるのではなからうか。八重山地区は三カ年平均を上廻ること何んと六〇%一%で今後の増反は北部地区と同様競争作物の出現により大巾の増反はむづかしからう。各地区共面積の増加による増産は期待うすくむしろ品種改良や栽培技術の合理化により反当収量を増やす方向にもつていくべきではなからうか。

戦後の地区別作付面積は第二表の通りで一九五〇年期以降一九五五年期までは宮古地区が首位で、一九五六年期は南部地区が首位を占めている。各地区共作付面積の増加は顕著であるが特に増反の著しいのは八重山地区で一九五四年期は一九五〇年期の約三倍、五五年期は五倍強五六年期は六倍強と大巾に伸びている。蔗作率の高きは宮古地区で一九五四年期以後三〇%を越え五六年期には三三、三%に増加し全耕地面積の三分の一を占有するに至つた。当地区戦前の蔗作率は二六%前後が限度であつた様である。然るに戦後三三%以上に伸びた、め栽培が粗放化し、反当収量の減少を招来していると言われている。将来各地区における蔗作面積の増加は他作物との均衡上考慮さるべき問題ではなからうか。

第三表 年次別反当収量

戦前反当収量の最高年次は昭和十三年期で二二、一一五斤、最低は大正十一年の四、五〇八斤となっている。昭和九年一昭和十一年の三カ年平均反当収量は九、三〇六斤で戦後一九五四年期五五年

第三表		年次別反当収量			
年次	反当収量	1950年の反当収量を100とした指数	年次	反当収量斤	1950年の反当収量を100とした指数
1950年	5.752斤	100	1954年	10.630	185(155)
51	7.499	130	55	9.543	166(139)
52	6.854	119(100)	56	6.600	115(97)
53	7.696	134(112)			

備考 (1) ()内は1952年を基準にした指数である。

(2) 糖業課資料より作成

期はこの平均を上廻る事夫々二三七斤、一、三二四斤で上昇を示している。一九五六年期は数度に互る暴風や干魃のため減少し三カ年平均の略七〇%に当つている。

戦後反当収量の遷は第三表の通りである。一九五〇年期以降反当収量は年々増加し一九五四年期は戦後最高の反当収量を示し一〇、六三〇斤で、之を一九五〇年期に比すれば八四・八%、一九五二年期に比すれば五五、一%の増加率である。一九五六年期は自然的災害のため反当収量の減少が著しく戦後の最低となっている。

第四表 地区別反当収量

戦前反当収量の多い地区は南部で、次いで中部、北部、宮古、八重山地区の順である。反当収量の一

第四表 地区別反当収量

年次	1952年の反当収量を100とした指数		年次	1952年の反当収量を100とした指数		
	反当収量	1952年の反当収量を100とした指数		反当収量	1952年の反当収量を100とした指数	
一九五二年	北部	8.300斤	100	北部	8.420斤	101
	中部	9.000	100	中部	10.650	118
	南部	9.709	100	南部	9.074	93
	宮古	5.700	100	宮古	7.330	129
	八重山	7.377	100	八重山	5.470	74
一九五四年	北部	7.861斤	95	北部	5.540斤	66
	中部	11.916	132	中部	8.110	90
	南部	12.246	126	南部	6.667	69
	宮古	8.045	141	宮古	5.972	105
	八重山	6.032	82	八重山	5.697	77
一九五五年	北部	9.590	116	備考 (1)1950年、1951年は資料不備のため省略した。 (2)糖業課資料より作成		
	中部	14.255	158			
	南部	12.920	133			
	宮古	7.120	125			
	八重山	6.610	90			

番多い昭和十三年期についてみるに最高は南部地区の一五、二七七斤、次は中部地区の二二、六〇八斤で他の三地区は何れも一万斤以下八重山は低位生産地区で反当収量低く、中部南部地区の半分以上である。又昭和九年一昭和十一年の三カ年平均地区別反当収量を見るに北部七、二二〇斤、中部九、九〇一斤、南部一一、六二四斤、宮古七、八六七斤、八重山四、四七〇斤で戦後一九五五年期は宮古地区を除く他の地区は三カ年平均を上廻っている。特に中部地区は四、三三五斤も上廻っている。一九五六年期は戦後に互る暴風被害のため八重山地区を除き他の地区は何れも前記三カ年平均に及ばない。戦後反当収量の推移は第四表の通りで、一九五四年期を除き各年期中部地区が首位で、南

部、北部、宮古、八重山の順戦の傾向と大差がない。最高と最低の差は著しく約半分位である。之は自然的災害の差あるいは地力の差による所大なりといへども栽培技術の差も見逃してはいけない大きい要因である。反当収量の増加率は宮古地区が第一位となつて居るが之は基準年期の反当収量の低かつた事にもよるが反面栽培技術 進歩の現れでもあろう。一九五六年期は各地区共反当収量が低く、特に北部地区は三三%余の反収減で之に対し宮古地区のみは四・八%の反当収量の増加を来たしている。中部区は一九五二年以来年々反当収量の増加が目立っているが、之は戦前から栽培が盛んでしかも反当収量の多い西原、中城、与那城、具志川等の諸村における作付面積の増加と地力の高い土地に甘蔗の作付がなされてゐるためではなからうか。

第五表 年次別甘蔗生産高

戦前蔗茎生産高の最高は昭和十三年期の十八億八千九百九十一万斤で明治末期の生産高の三倍に当つて居る。明治末期六億余斤の生産高から年々増加はしているが十億斤を超過したのは大正十一年期以後の事で、それ以前の生産高は年により豊凶の差が著しく三億余斤に及ぶ年々もあつた。昭和九年一十一年の三カ年平均蔗茎生産高は一四億三千九百五十二万九千八百二十斤で之を戦後の最高一九五五年期と比較してみると、当年期は四七%五

部、北部、宮古、八重山の順戦の傾向と大差がない。最高と最低の差は著しく約半分位である。之は自然的災害の差あるいは地力の差による所大なりといへども栽培技術の差も見逃してはいけない大きい要因である。反当収量の増加率は宮古地区が第一位となつて居るが之は基準年期の反当収量の低かつた事にもよるが反面栽培技術 進歩の現れでもあろう。一九五六年期は各地区共反当収量が低く、特に北部地区は三三%余の反収減で之に対し宮古地区のみは四・八%の反当収量の増加を来たしている。中部区は一九五二年以来年々反当収量の増加が目立っているが、之は戦前から栽培が盛んでしかも反当収量の多い西原、中城、与那城、具志川等の諸村における作付面積の増加と地力の高い土地に甘蔗の作付がなされてゐるためではなからうか。

第五表 年次別甘蔗生産高

年次	1950年の生産高を100とした指数		年次	1952年の生産高を100とした指数	
	生産高	1950年の生産高を100とした指数		生産高	1952年の生産高を100とした指数
1950年	77.642千斤	100	1954年	617.702	796
51	223.179	287	55	776.421	1.000
52	294.280	379	56	619.267	698
53	388.497	500			

五五年期の生産高は七億七千万斤で戦前の一地区の生産高より僅かに多く、又大正の初期ごろの生産高と同等位で前記一ヶ年平均生産高の五割程度である。

糖業課資料より作成
を基準年期とすれば、五一年期は約三倍五二年期約四倍五三年期五倍、五四年期約八倍、五五年期十倍五六年期約七倍と大巾な増産を示している。五六年期は前述の如き理由により五五年期より下廻つてゐる。

六年期は四三%の復旧率となつて居る。前記作付面積の復旧に比し生産高の復旧は小さい戦後の生産高は第五表の通りで、年々増加している。一九五〇年期を基準年期とすれば、五一年期は約三倍五二年期約四倍五三年期五倍、五四年期約八倍、五五年期十倍五六年期約七倍と大巾な増産を示している。五六年期は前述の如き理由により五五年期より下廻つてゐる。

発行所 琉球大学農家政学部
 発行人 島袋俊一
 印刷 沖繩タイムス社